

ニューズレター 目次

1	第 35 回セミナーのお知らせ	1	3	修士論文発表会の報告	5
2	3 学会合同シンポジウムのお知らせ	5	4	事務局から	9

1 第 35 回セミナー（豊岡）のお知らせ

2007 年の春の第 35 回セミナーは、下記のようにコウノトリの野生復帰の現場、兵庫県豊岡市で行うことになりましたので、お知らせします。

なお、セミナー時のベビー・シッティングは、「セミナー時におけるベビーシッターの取り扱い」（ニューズレター第 38 号/通算 43 号参照）に基づきます。詳細情報は、参加申込者に追ってお知らせします。

【日 時】 2007 年 6 月 22 日（金）～24 日（日）

【場 所】 兵庫県豊岡市：ホテルブルーきのさき、豊岡市城崎町総合支所、他

【テーマ】 野生動物との共存を問い直す

【開催主旨】

2005 年 9 月 24 日、兵庫県豊岡市で 5 羽のコウノトリが上空へ放たれました。この放鳥はメディアで盛んに取り上げられたので、知っている会員の方も多でしょう。

コウノトリは、全長約 110cm、体重は 4 - 5kg、翼開長（翼を広げた長さ）は 220 cm にもなる、水辺に生息する大型の鳥類です。日本では、田んぼや湿地を餌場に、松の大木などに巣をかける「里の鳥」でした。まさに里の鳥として、江戸時代には全国的に見られたコウノトリが野生絶滅したのは、1971 年のことです。

最後の生息地となった豊岡では、一度野生下で絶滅したコウノトリを、飼育下で繁殖し、再び野生に戻すという野生復帰プロジェクトが進行中です。飼育下繁殖による増殖、農薬や化学肥料に頼らない農業、田んぼや河川の自然再生、里山の整備などさまざまな取り組みが進められています。安全な米と生きものを同時に育む「コウノトリ育む農法」に取り組む農業者が現れていますし、行政は「環境と経済の共鳴」を理念に地域づくりを進めています。よそ者の研究者が居を構え野生復帰の研究に携わっています。

地域住民、農業者、NPO、企業、行政、研究者等が協働（時に対立）しながら、飼育から「野生」へと意味変容するコウノトリとの共存と地域づくりのあり方を平行して模索しているところに、このプロジェクトの面白さがあるといっているでしょう。ここでは、これまで対立すると考えられていた「環境/経済」、「人工/野生」、「安全/自然」、「保護/愛護」、「地元/よそ者」といった区分が問い直されています。

これまで野生動物との共存に関しては、生態学など自然科学の知が議論を引っ張ってきました。しかし、生態学の中なかでも、生態系の重要な要素として人間社会を含む考えが出てきており、特に、野生復帰や自然再生といった「人間の介入」が自覚的で強くなっていく現場では、生態学と共に環境社会学の視点への期待が高まっています。

環境社会学は、コウノトリをはじめとする里に暮らす野生動物との共存という課題に対して、どのような論点と知識を提供できるのでしょうか。そんなことを考えるセミナーにしたいと思っています。

【参加申し込み・期限】

なるべく電子メールにて、5月28日（月）までにお申し込み下さい。

名前、所属、住所、電話番号、ファックス番号、メールアドレス、学生／一般、性別（女／男）、22日宿泊（ブルーきのさきに宿泊する／宿泊しない）、23日宿泊（ブルーきのさきに宿泊する／宿泊しない）、懇親会（参加する／参加しない）、希望するエクスカーション（第1希望 / 第2希望 / 参加しない）、託児所（利用する／利用しない）

以上の項目をご記入の上、

35seminar@stork.u-hyogo.ac.jp

まで送付願います。もしくは同封の申し込みハガキ（お手数ですが50円切手をお貼りください）にて、お申し込み下さい。

【スケジュール（予定）】

6月22日（金）	16：00 19：00 19：00	受付開始（ホテルブルーきのさき） 各種委員会 語り部（コウノトリの郷公園・元飼育長：松島興治郎さん）
6月23日（土）	8：30～ 13：30 14：00～ 15：30 16：00～ 18：30 19：30 21：30～	エクスカーション（バス発着：ホテルブルーきのさき） 総会（城崎総合支所） 自由報告（城崎総合支所） 懇親会（ブルーきのさき） 朝まで討論会
6月24日（日）	9：00～ 12：00	シンポジウム（城崎総合支所） 終了後解散

【参加費】

一般会員 32,000 円程度、学生・院生は 25,000 円程度

※宿泊費 2泊分、エクスカーション代、懇親会費、23日昼食代を含みます。宿泊数、懇親会参加の有無などにより参加費が変わることがあります。上記は全日程参加の場合の参加費です。なお今回は、収容人数や移動等の関係から、名湯・城崎温泉に宿泊することにいたしました。

【エクスカーション】

豊岡市周辺で展開しているコウノトリの野生復帰を目指したさまざまな取り組みは、自然との共存、野生動物との共存を考える上で、示唆に富むものと考えられます。以下に予定する4つのコースの中

で、これからの共存のあり方について考えていきたいと思います。

(1) 「田んぼでコウノトリを育む」コース (定員 40 名)

田んぼに生息するドジョウ、フナなどを餌にする「農業生物」であったコウノトリと人は、田んぼという場では出会い、かかわっていました。田植え唄に歌われる一方で、田植えした直後の稲を踏み込むので、かつては「害鳥」として扱うこともあったようです。

農業生物であるコウノトリを野生復帰するためには、農薬や化学肥料に頼らない新たな農業の展開が求められます。豊岡では環境創造型農業に向けた取り組みが展開され、「コウノトリ育む農法」として技術の確立が目指されています。この農法は、ただ農薬や化学肥料の削減というだけではなく、田んぼで安全安心なおいしいお米と生きものを同時に育むことと、この農法を通して、コウノトリも棲める豊かな地域社会、環境づくりを目指しているところに特徴があります。豊岡農業改良普及センターの案内により、実践している田んぼを訪れ、農業者のお話を聞きます。

(2) 「水害復興と自然再生を両立する」コース (定員 40 名)

2005 年 10 月に近畿地方に上陸した台風 23 号は、円山川流域に豪雨をもたらし、破堤による甚大な被害が生じ、豊岡市街地に代表される内水被害など円山川下流域全体で破滅的な被害が発生しました。浸水面積は 4000ha を超え、約 10000 戸が浸水被害を蒙りました。現在、国土交通省による円山川緊急治水対策が展開され、水害に強い円山川に向けて急ピッチで改修が進んでいます。

その円山川は日本海から遡ること 16km で海拔 1m という低勾配を特徴とし、水害をたびたび起こし地域住民を泣かす一方で、広大な湿地に恵まれた流域は、豊かな生物層を育み、コウノトリの最後の生息地でもありました。河川改修が進む円山川はコウノトリの生息地として再生することも期待され、河川敷には湿地が造成されています。NPO コウノトリ市民研究所の菅村定昌さんと国土交通省の職員が、水害復旧と自然再生の両立を目指す現場を案内します。

(3) 「環境と経済の共鳴を目指す」コース (定員 25 名)

豊岡市は、コウノトリの野生復帰を通して、環境を良くする取り組みにより経済効果が生まれ、経済効果が生まれるから環境を良くする取り組みをするというように、環境と経済が相互に刺激し合いながら互いを高めあっていく「環境と経済が共鳴するまち」を目指した取り組みをすすめています。

①環境問題への取り組みを持続可能にする、②経済的に自立する、③人々の暮らしを誇りあるものにする、という 3 つを目的とし、施策を展開しています。豊岡市コウノトリ共生課の佐竹節夫さんによる案内により、2002 年 8 月に豊岡に飛来し、ハチゴロウの名で親しまれた野生コウノトリ (2007 年 2 月に死亡) が利用していたことから湿地公園として整備されることになった「ハチゴロウの戸島湿地」、「コウノトリ本舗」などを回ります。

(4) 「野生復帰を科学する」コース (定員 25 名)

一度絶滅した生物種の野生復帰をすすめるためには、飼育繁殖技術の確立、遺伝的に保証され性・年齢構成も考慮された飼育個体群の創出、再導入のための適地の用意とその環境の維持、再導入のための技術の開発、野生下に新たな個体群の確立、といういくつかのステップの実現が必要になります。ただ、里に生息するコウノトリの野生復帰はそうした自然科学的な取り組みにとどまりません。里での人びとの営みや自然とのかかわりを見直し、どう再生させるかという問題にもつながっていきます。野生復帰とは、コウノトリと共に暮らせる地域社会をつくる「地域再生」という総合的な取り組みなのです。1999 年 11 月に開園した兵庫県立コウノトリの郷公園 (兵庫県立大学自然・環境科学研究所) では、こうした課題の解決を目指した実践的な研究を進めてきました。郷公園の研究と実践を紹介します。

【自由報告 2007年6月23日】

A 部会

A-1. 農地認識の違いにみる新規有機農業者の受け入れ——茨城県石岡市八郷地区の取組みを事例として

閻美芳（早稲田大学大学院）

A-2. 環境問題解決プロセスの蛇行性——秋田県大潟村における水質改善農法研究の事例から

谷口吉光（秋田県立大学）

A-3. 物乞いジカと襲撃グマ——アメリカ西部国立公園における野生動物問題の環境史

加藤鉄三（立教大学非常勤講師）

B 部会

B-1. 街並み景観づくりと山村の内発的発展——山形県金山町を例に

奥田裕規（森林総合研究所）

B-2. 流域ガバナンスにおける流域委員会の機能——武庫川流域委員会の中間的検証

中川芳江（(株)ネイチャースケープ）

B-3. NPOと行政との協働——地方自治体における委託事業の現状と課題について

萩原なつ子（立教大学）

【シンポジウム 2007年6月24日】

テーマ「野生動物との共存を問い直す」

エクスカッションで、コウノトリとの共存を目指す取り組みが、「安全/自然」「環境/経済」、「人工/野生」、「保護/愛護」、「地元/よそ者」といった区分を問い直しながら、進められていることが示されると思います。それを踏まえシンポジウムでは、1990年からコウノトリ保護・増殖行政に携わっている佐竹節夫氏、コウノトリ育む農法に取り組んでいる暁悦喜氏、市民の立場から野生復帰に関わっている菅村定昌氏、よそ者の研究者として、広報マンとして、そして生活者として多様な活動を展開している池田啓氏、地域での環境保全を問い直している生態学者の佐藤哲氏という5人のパネリストの方々と、野生動物との共存と環境社会学の役割について考えます。

司 会：菊地 直樹（兵庫県立大学/兵庫県立コウノトリの郷公園）

パネラー（予定）

佐竹 節夫（豊岡市コウノトリ共生課）

暁 悦喜（コウノトリの郷営農組合）

菅村 定昌（NPO 法人コウノトリ市民研究所）

池田 啓（兵庫県立大学/兵庫県立コウノトリの郷公園）

佐藤 哲（長野大学）

【第35回セミナー事務局】

セミナー実行委員：菊地直樹（事務局長）、金沢謙太郎、荒川康、帯谷博明（自由報告）、丸山康司（アドバイザー）、研究活動委員会

問い合わせ先：菊地 直樹（兵庫県立大学/兵庫県立コウノトリの郷公園）

〒668-0814 兵庫県豊岡市祥雲寺字二ヶ谷 128 兵庫県立コウノトリの郷公園

TEL 0796-23-5666 FAX 0796-23-6538

E-mail:nkikuchi@stork.u-hyogo.ac.jp

2 環境3学会合同シンポジウム 2007

「森林保全と持続可能な管理」のお知らせ

今年度も、環境関係の3学会の合同シンポジウムが下記の日程で開催されます。詳細はおよび申込方法（事前の申込が必要です）は、同封したパンフレットをご覧ください。

【日時】2007年6月9日（土）13:30～17:30（懇親会：18:00～）

【会場】弁護士会館2階クレオB・C（東京）

【テーマ】「森林保全と持続可能な管理－環境経済、社会の総合的向上と森林保全－」

【プログラム】同封したパンフレットをご参照ください

【申込方法】パンフレットに記載された方法でお申し込みください

主催：環境経済・政策学会、環境法政策学会、環境社会学会

協賛：環境科学会、環境アセスメント学会

後援：環境省（予定）、林野庁（予定）、日本弁護士連合会、損保ジャパン環境財団（予定）

（環境社会学会実行委員：寺田良一・萩原なつ子）

3 修士論文発表会（特別研究例会）の報告

2006年度の修士論文報告会は、明治大学リバティタワーにて2007年3月10日に行われました。計7報告を二部に分け、関東学院大学の湯浅陽一先生と恵泉女学園大学の松村正治先生に司会をお引き受けいただきました。報告者とタイトルは、下記のプログラムの通りです。30名以上の参加で、すべての報告について活発な質疑が行われました。好意的かつ建設的なコメントが多く、修士論文報告会の目的を果たせたと思われまます。なお、支出費用は、会場費8,925円、アルバイト代5,000円で、すべて環境社会学会から補助をいただきましたので、あわせてご報告申し上げます。

プログラムと会場の都合で全体討論の時間をとれなかったのが残念でしたが、各報告者がよくご準備くださったこと、博士課程の方を含めた多くの参加者から積極的な質問や助言をいただいたこと、報告者、司会者、質問者すべての方のご協力によって見事予定どおりに進行していただいたことに感謝申し上げます。

（担当者、寺田良一、箕浦一哉、藤川賢）

【プログラム】

第1部（13:05～14:50） 司会＝湯浅陽一（関東学院大学）

古屋将太（法政大学大学院）「市民出資による自然エネルギー導入と社会の共進化」

荒川萌（龍谷大学大学院）「日本の環境首都コンテスト」の可能性

－NPOによる自治体環境政策への政策提言の一考察－

高橋猛生（法政大学大学院）「政策形成過程における「政府の失敗」を生み出す諸要因とは何か」

－三番瀬の自然再生を事例として－

第2部（15:10～17:30） 司会＝松村正治（恵泉女学園大学）

森田系太郎（立教大学大学院）「Engendering Global Warming With an Ecofeminist Perspective」

角口裕子（東京大学大学院）「人と野生鳥獣のかかわり方をめぐる歴史と教訓」

－戦後日本の狩猟ブームを読みとく

山下真里（東京農工大学大学院）「沙漠化地域における住民を主体とした自然資源管理の課題」

－中国・内蒙古自治区ホルチン沙地を事例として－

石井真樹子（東京農工大学大学院）「山村社会におけるIターン者受け入れの現状と課題」

－長野県大鹿村を事例として－

第1部について

湯浅陽一（関東学院大学）

2006年度修士論文発表会では、7本の報告がなされた。私が司会を務めさせていただいた前半の3報告について、要旨と聴衆からの指摘、全体に対する司会者の印象を記すことで発表会の報告とした。

古屋将太氏による「市民出資による自然エネルギー導入と社会の共進化」は、市民出資によって風力や太陽光による発電という自然エネルギーの導入が進められていることをふまえ、この状況を「エネルギー転換」と「エネルギーパラダイム転換」との相互促進による共進化プロセスという枠組みを援用することで分析したものである。報告では、市民出資による自然エネルギー導入が環境システムと社会システムの共進化プロセスとして描かれ、共進化を促進させていくための条件としてフィードバックモニタリング論が提示された。同報告に対しては、風車事業者側の環境運動的関心が出資者に伝わっていない点をどのように捉えるのか、共進化プロセスという枠組みが事例の分析枠組みとして適格的であるのかどうかなどの点が指摘された。

荒川萌氏による『日本の環境首都コンテスト』の可能性～NPOによる自治体環境政策への政策提言の一考察～は、NPOが主催している「日本の環境首都コンテスト」を取り上げ、この取り組みを、主催者の意図する住民参画などの政策の自治体における浸透の状況や、参加自治体の属性と参加の促進要因という視点から分析したものである。報告では、住民参画に関する自治体の平均得点率は上昇傾向にあるもののコンテストが与えている影響の検討については今後の課題であること、自治体のコンテストへの参加は職員の意識が重要な要因であることが報告された。同報告に対しては、環境政策でなく住民参画政策を選んだ理由が問われた他、不参加自治体との比較や、自治体側からの回答と政策の実情との乖離に配慮した分析を行うことの必要性などが指摘された。

高橋猛夫氏による「政策形成過程における『政府の失敗』を生み出す諸要因とは何か～三番瀬の自然再生を事例として～」は、三番瀬における自然再生を事例として、システム・主体・アリーナの相互連動に着目し、「政府の失敗」を生み出す特質を導出したものである。報告では、「多数の主体の関与と複数のアリーナの分立」という状況が「断片的決定・帰結転嫁・無責任型」の連動を引き起こしたとされ、こうした状況を克服するための政策提言として、公募委員によるファシリテーターの存在の重要性が報告された。同報告に対しては、「政府の失敗」や「アリーナ」といった概念の使い方が明確でないことや、公募委員がファシリテーターとなりうるのか、ファシリテーターの強調は「アリーナの分立」という分析と合致しないのではないかといった指摘がなされた。

いずれの報告も事例研究にもとづくものであり、環境社会学におけるオーソドックスな手法を採用している。また、古屋氏と荒川氏は、NPOの活動にインターンやボランティアスタッフとして参加することを通じて入手したデータを活用している。「研究者（の卵）によるフィールドワーク」とは一味違った経験をふまえていることにも、現場を重視する環境社会学らしさが感じられた。

3つの報告に共通して見出される課題は分析することの難しさであろう。対象としている事例のどの部分に焦点を当てて分析するのか。分析するために適格的な枠組みをどのようにして見つけ出し、構築するのか。分析しようとしているデータと実情との乖離をどのようにして埋めていくのか。会場の聴衆からは、3つの報告すべてに対して、分析のあり方を問う指摘がなされた。分析の難しさはあらゆる研究論文に共通するものである。おそらくは初めての本格的な研究論文である修士論文において、的確な分析を行うことの難しさは格別であると思われる。その難しさに正面から挑戦し論文をまとめたことに、3氏の並々ならぬ意欲と可能性が感じられた。今後の活躍に期待したい。

広い問題関心と限られた時間のジレンマ (第2部)

松村正治 (恵泉女学園大学)

毎年、年度末に開かれる「環境社会学・修士論文発表会」が、3月10日(土)に明治大学で開催された。全体は2部構成で7本の報告があった。私は後半(第2部)の4本(第4～第7報告)について司会を担当したので、その様子を以下に報告する。

第4報告は、森田系太郎さん(立教大学大学院)による「Engendering Global Warming With an Ecofeminist Perspective」であった。日本の環境社会学会では、これまで理論的な研究が少なかったため、エコフェミニズムの視点から地球温暖化をジェンダー化するというタイトルは、出席者の関心を大いに引きつけたように思う。森田さんは、エコフェミニズムの思想を5つに整理した上で、物質的エコフェミニズム(materialist ecofeminism)の視点から、地球温暖化をもたらしている原因が男性圏にあるのに、その影響は自然と女性圏にも及んでいることを指摘した。この報告に対して、「エコフェミニズムの視点を持ち込むことで、地球温暖化の問題にどのような新しい局面が見えるようになるのか?」など、いくつかの質問があった。しかし、隙のない理論を組み立てようとする森田さんの立場からか、討議を重ねても論点を深めることはできなかった。

第5報告は、角口裕子さん(東京大学大学院)による「人と野生鳥獣のかかわり方をめぐる歴史と教訓—戦後日本の狩猟ブームを読みとく」であった。角口さんは、人と野生鳥獣のかかわりとして狩猟文化に注目し、資料をもとに近世以降の歴史をたどりつつ、戦後の一時的な狩猟ブームを中心に報告した。「狩猟者が自然を破壊するという社会的イメージはどのように形成されてきたのか?」という問いがシンプルだったので、銃器や青少年育成などと関連づけながら狩猟イメージの変遷を明らかにした報告内容は理解しやすいものだった。これに対しては、狩猟と銃器との関係のほか、欧米における狩猟の歴史と比較などについて質問があり、それに答えるかたちでいくつかの論点が浮き彫りになり、最後に角口さんから、狩猟文化について日本と欧米の比較研究をすすめたいと抱負が語られた。

第6報告は、山下真里さん(東京農工大学大学院)による「沙漠化地域における住民を主体とした自然資源管理の課題—中国・内蒙古自治区ホルチン沙地を事例として」であった。山下さんは、生活様式と自然資源の利用との相関関係に着目し、建国(1949年)から今日までの変遷と、2つ分場の地域間比較をおこなった結果を報告した。通時的かつ共時的な調査報告だったので、この地域の住民と自然資源とのかかわりが立体的に伝わってきたが、おもに自然科学的な視点から分析していたので、民族や国家という重要な変数は脇に追いやられていた。この点を衝いた質問に対して、山下さんもすでに難点を自覚しており、十分にデータも得ていたようなので、今後さらに総合的な研究へと進めていくことだろう。

第7報告は、石井真樹子さん(東京農工大学大学院)による「山村社会におけるIターン者受け入れの現状と課題—長野県大鹿村を事例として」であった。石井さんは、2つの集落を対象として、主としてIターン者と地元住民との関係について、両者を比較した結果を報告した。Iターン者が住居を取得する経緯に着目した点はユニークであったが、サンプル数が少なかったためか比較考察の部分が弱かった。また、Iターンしても地域になじめず他所に移住した人に対しては、なかなか意見を聞けないという方法論上の困難も指摘された。

以上の4報告は、研究の対象や手法がそれぞれ異なっていたので、総じて興味深く聞くことができたが、気になった点があるので、それを記してまとめたい。すなわち、論文全体を覆う広い問題関心と、限られた時間の中で話せる分量とのギャップを埋めきれない報告が多かったことである。研究成果のエッセンスを明瞭に示そうとする作業は、論文の論理構造を再認識できる良い機会である。こうした発表の場を上手に利用して、優れた雑誌論文のかたちにまとめて投稿してほしい。おそらく、この発表会は今すぐに評価されるのではなく、報告者の今後の研究成果によって評価されるのだから。

「環境社会学・修士論文発表会」に参加して

森久 聡（法政大学大学院）

今回の修士論文発表会はオーディエンスの人数が少なく、こぢんまりとした雰囲気であった。それでもこれから修士論文を書こうとしている修士課程1年の院生も出席し、彼ら彼女らは、これから一年間をかけて目指す具体的な目標として各報告に耳を傾けていた。その中で、5年前の修士論文発表会では発表者となり、今や「ベテラン院生」となってしまった者として、その時の経験と現在の自分とを絡めて感想を述べたいと思う。

様々な領域・分野からの研究報告があったが全般的に振り返ってみると、地道に調査資料を収集し、その無い現状分析を行なっているな、という印象を持った。そして今後は「なぜ、そうなっているのか」を問うことで、その現状を現状足らしめている社会的事実へと迫れば、研究としては大きく飛躍するであろうし、そうしたポテンシャルを持った発表が多かったと思う。私事になるが、そのような研究上の発展的な展開が上手くできなかった自分は、後に研究テーマを修士論文で扱った問題から別のものに修正することになってしまった。またパワーポイントを使ったプレゼンテーションの技術も高く、事前に周到な準備をしてくれているように思えた。

それでも、もし発表者の方のなかに、自分のゼミで通じた議論が通じないといった手応えを持ったり、思いもよらない立場からの質問に慌てて応答せざるを得なかった経験を覚えた人がいたとすれば、私自身も同様の経験があって、それが今後の「学会デビュー」に向けてよい訓練になったことをお伝えしたい。そしてこうした経験は、インターカレッジで行われる修士論文発表会や他大学のゼミにモグリ参加することの「醍醐味」のひとつであると思う。

また、ゼミでも研究会でも自分の研究成果について報告をするときに、私が一番「怖い」と感じたのは、これから学会等で活躍することを目論む博士課程の先輩達からの質問であった。そう思って会場を見渡すと、どうやら私とその「怖い先輩達」の役割を担わなければいけない状況のようだ。そこで何やら覚悟を決め、勇気を振り絞って色々と質問をさせていただいた。不躰に何度も質問してしまったが、いずれの質問も現時点で答えられなくとも、今後答えられるようになって欲しいと思って尋ねたものである。あの時の質問は、研究のオリジナリティや既存の研究成果に対する学的貢献といった事柄へと繋がると思う。そしてこのことは、自分自身がいつも「怖い先輩達」から問われていることであり、それをあの場では——自分のことを棚に上げて——「質問」という形式で表現したのであった。丁寧な形ではないが、この場を借りて補足しておきたい。というのは、こうした研究例会には恒例の懇親会が開かれなかったため、質問の意図や目的を説明したり、報告内容について詳しく話しを聞いたりしてフォローをする機会がなかったからである。

最後に、私にとってこの修士論文発表会は、新年度を直前に控えたこの時期にふさわしく、初心に帰る絶好の機会となり、とてもみずみずしい時間を過ごすことができた。この発表会を運営していただいた方々と発表者の方々に心より感謝したいと思う。

4 事務局から

【2007年度の会費請求について】

2007年度の会費振込用紙を同封いたしました。すでにお振込みいただいた方には、行き違いになってしまう場合がありますので、ご容赦ください。

【会員資格喪失について】

以下の方々は、3年以上会費が未納で、連絡が取れないか、3月に郵便またはメールで行った会員資格継続意思の確認に対して、返信がなかった会員です。運営委員会の承認のもと、本学会の会則第7条2項に基づき、会員の資格を喪失したものとさせていただきます。もし、会員継続のご意思あるいはご異議のある方がおられましたら、至急学会事務局宛にご連絡ください。

岩本史緒	須崎玲	李允淑	今泉秀雄	木下茂樹	熊沢夏子	金今善
荒川茂則	小國徹	落合仁司	菊池将司	黒田洋一	合原亮一	何大勇
王俊秀	篠原真紀子	関口鉄夫	説田寿	高津等	高橋徹	VALENCIA, Luzviminda B.
桜井勤	富山一郎	仲川新二	服部伊人	馬場高志	溝内辰夫	鄭守皓
藤堂麻理子	皆川美音子	峯猛	小野理	永田研	久野隆志	金恵林
早川留美子	王培英	吉川光洋	李継堯	信夫隆司	鈴木岳海	浜口亮
秋道智彌	今関隆志	加藤浩司	加藤ゆうこ	木島慶太	小林豊	井上元
佐久間寿継	小滝浩美	杉浦嘉雄	谷口照三	陳禮俊	蘇麗芬	利根川治夫
長谷川佳子	原田克己	藤田浩嗣	古田尚也	丸井清泰	山岸美穂	原剛
山下世志彦	渡部伸雄	小嶋修一	高津良幸	川端直志	益子将明	竹内潔
佐川直人	織田和家	高橋美香	藤堂史明	清水実	古賀陽子	金星姫

『環境社会学会ニューズレター』

第43(通算48号)

発行日：2007年5月10日

●
JAES Newsletter

No.43

May.2007

●
編集・発行：環境社会学会事務局

〒422-8529 静岡市駿河区大谷 836

静岡大学人文学部社会学科平岡義和研究室内

FAX：054-238-5082 E-mail:jkankyo@ipc.shizuoka.ac.jp

郵便振替口座：00530-8-4016

口座名：環境社会学会

<http://wwwsoc.nii.ac.jp/jses3/>
